

研究ノート

古代中国における印章の起源について

—新出の考古遺物による再検証—
On the Origin of Seals in Ancient China

高久 由美¹
TAKAKU Yumi

キーワード: 印章、殷墟、貞人、漢字
Key words: Seals, Yin-xu site, oracler, Ancient Chinese Characters

1 はじめに

中国における印章の使用が、戦国時代における文字使用の拡がりと同様に各国で独自に発達を遂げたことは周知の事実である。しかし、戦国以前の中国における印章については、その実態を明らかにするために利用しうる考古遺物が数少ないため、その使用状況を明らかにし、さらにさかのぼって印章の起源について解き明かすことは困難なのが実情であった。本稿では、戦国時代を一千年近く遡った殷代後期の都とされてきた殷墟の出土遺物として伝存する3点の銅印を皮切りに、近年の殷墟の科学的発掘により初めて世に出現した銅印も対象に加え、各資料の検討を通じて、漢字研究史および甲骨学史の観点から、関連する問題を提起し、あわせて中国における印章の起源について考察したい。

2 伝殷墟出土古璽の流伝

安陽出土とされる殷璽の出現は、『鄴中片羽』(1935年2月刊、北京尊古齋)に著録された2顆がその始まりである。本書の編者は、北京尊古齋の主人、黄濬(1891—1937)で、柯昌泗の序によると、本書の収蔵品は「甲骨、彝器、戈矛、陶玉之属、都四百四事」(甲骨、青銅器、兵器、陶器、玉器など、全部で四百四点ある)という。安陽より出土した様々な遺物が収録されたことがわかるが、ここでの戈矛(兵器)と陶玉(青銅器の陶範および玉器)の間に、2顆の銅印の写真と印影が収録され、璽および奇字璽という名称が与えられている(図1 a.b.)。第一の璽については、印文を読み誤り、本来はであるべきところ天地が逆に置かれたもので、正しくは璽とすべきところであった。亜字の内部に複数の文字構成要素が配された、殷周時代の金文に屢々みられる図案である。亜字の内部に犬や鳥などの禽獣類を構成要素とする図象銘も数多くの類型があり、本印と共通の構成要素をもつ殷金文には (総集 6343)、 (集成 7277) などがある。亜字形内部に鳥とそれを捕獲するための道具があり、本印では他に左右両側に、古文の示字の祖型とされるT字形がある。これら構成要素を漢字に転写すれば璽は「亞禽示」印ということになる。第二の奇字璽は所謂「古文奇字」に因んだ名称であるが、田字格の中に記された四字全ての解読が難解を極めたことに拠るものである。印文の上下左右の向き、いずれの文字から読み始めるかなど、これまで様々な説がおこなわれてきたが、未だ一定の解釈を得るに至っていない²。

初集刊行の2年後、続編として『鄴中片羽二集』(1937年8月)が刊行されたが、ここでも兵器と青銅器の陶範の間に、璽という名称の銅印1顆が収められた(図1 c.)。于省吾の序文によれば「黄君伯川、既印『鄴中

片羽』、行於世、又哀其所見安陽出土之古器物都二百九十品」(黄伯川君が出版した『鄴中片羽』は広く世に通行していたが、さらに安陽から出土した古器物290点を集めた)ということから、初集で著録された¹印璽および奇字璽とは別ルートで取得した銅印と考えてよいだろう。これら三印に共通する特徴は、何字と解釈するかは措くとしても、明らかに「文字」である点と陽文である点である。従って、粘土のような軟性の物質に鈴印された後は印面の文字が凹状になる。

黄濬が取得した殷墟出土の璽印のうち、二集に収められた²印璽は現在所在が不明である。初集に収められた³印璽と奇字璽は、『鄴中片羽』および『衡齋金石識小録』などに著録された後に⁴印璽とともに于省吾の收藏品となり、『雙劍詒古器物図録』に著録され、最終的に両璽は台北の故宫博物院の蔵に帰した⁵。



図1 伝殷墟出土三璽 a. ¹印璽 b. 奇字璽 c. ²印璽

3 新出銅印の出現状況と伝殷墟出土古璽との関連

故宮旧蔵獸面紋印と殷墟出土獸面紋印

黄濬が取得した古璽3点は、『鄴中片羽』に掲載された後にそのうち2点が台湾に移り台北故宫博物院の收藏品となった。ところで、これらとは別に北京の故宫博物院の收藏品となった黄濬旧蔵の古璽が一点あった(図2 a.)。印面の紋様から獸面紋璽と称され、燕下都より出土した戦国時代の半瓦当にある獸面文との類似が見られることから、当初は戦国時代の肖形印と推定されていた⁶。ところが、近年安陽から新たに銅印一点が出土したことにより、これも殷代の銅印であることが判明した⁷。発見地点とされる安陽市水利局は殷墟遺跡の東南部に位置し、該印は1998年に敷地内の夯土の建築基址を整理中に出土したものである⁸。上下辺長1.5 cm、左右辺長1.6 cmと、故宮蔵獸面紋印と比較して、一回り小さく、印面は陽文の獸面紋である(図2 b.)。大きさの違いはあるものの、両印ともに饕餮文とおぼしき紋様が双鉤で描かれた陽文印である点が共通しており、よく似た特徴が見て取れる。粘土のような軟性の物質の上に鈴印すれば、表面には凹状の獸面紋が現れることになる。

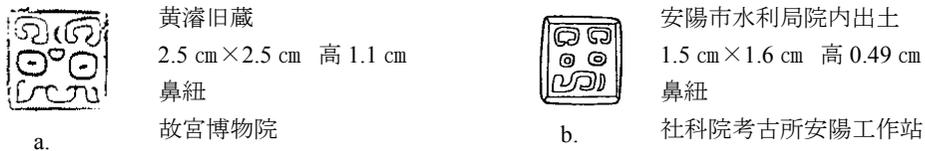


図2 a.故宮博物院蔵獸面紋印 b.安陽水利局出土獸面紋印

水利局獸紋印の出土した夯土の建築基址の年代は、層位的にこの建築基址と関連すると考えられる遺跡からの出土遺物の分析から、殷墟文化第3期、第4期、即ち殷墟後期と推定されている。さらにその後、社会科学院考古研究所安陽工作站により進められた殷墟の発掘調査に伴い、殷墟の南部から2点の銅印が発見された(図3)。2点はそれぞれ別の遺跡から出土しており、1件は2009年の王裕口村南地の発掘において、1件は2010年から翌年にかけての劉家莊北地の発掘において得られたものである。

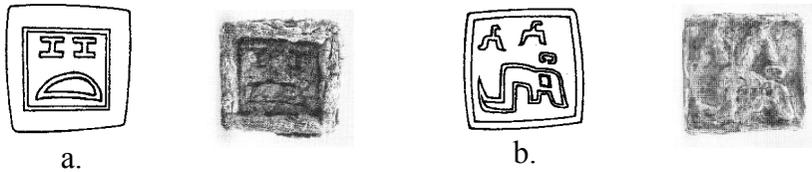


図3 a.王裕口村出土銅印 b.劉家莊北地出土銅印

殷墟王裕口出土 𠄎 字印

該印の出土地である王裕口村は、殷墟の西南部に位置し、2009年3月から12月にかけておこなわれた発掘では、道路や住居址、祭祀坑、墓葬などの発見が報告された⁷。当時の発掘で整理された墓葬は330余り、多くが族墓の形態で分布するものであった。該印はM103墓に埋葬されていた殉葬品で、該墓の墓主は年齢30歳前後の男性、墓内には殉人9人と犠牲5匹の他、土器、青銅器などの随葬器物も埋葬されていた。このうち青銅製品は全16点で、鼎、壺、簋、爵などの彝器と鏃、刀などの兵器、問題の銅印一顆もそのうちの一点である。銅印は一辺2.2cmから2.4cmの方形を呈し、かつ印面が内部に凹んだところに陰文がある。

印文は一字で 𠄎 とあり、上部のIIと下部の 𠄎 からなる。甲骨文に見える 𠄎 、 𠄎 などの標準的な字形からすれば、 𠄎 は本来 𠄎 とつくるべきところを、理由は不明であるが上下回転させて配置して 𠄎 としたものと思われる。該印と同一墓葬からは有銘青銅器が4点出土しており、これらの銘文との比較することにより、 𠄎 は 𠄎 と同一字との結論を導き得る。M103墓からは出土した有銘青銅器は鼎2件と爵2件があり、鼎1件の内腹部には 𠄎 銘があり、(図4 a.)、もう一件の鼎には二つの構成要素 𠄎 と 𠄎 が左右に並んでいる銘があった(図4 b.)。また、爵1件の蓋下には二つの構成要素 𠄎 と 𠄎 からなる銘が上下に配されている(図4 c.)。もう一件の爵の蓋下にある 𠄎 銘は「史」と積される文字で、本器の銘のみは 𠄎 銘とは異なる図象銘であった。

このほか王裕口村では、M103墓から7メートルほど隔たった箇所にあるM94墓の随葬器物中からも、 𠄎 という銘を帯びた鼎と弓型器が2点出土している(図4 d.)。随葬された一群の青銅器に共通して記された 𠄎 銘から、これらの墓葬が 𠄎 族の族墓である可能性が高いことがわかる。甲骨文における 𠄎 字の出現状況については次章で検討するが、これまでに殷墟南区の墓葬から出土した青銅器群の中に、同銘の青銅尊があることが報告されている⁸。1983年に戚家莊東地のM235墓から8件の青銅礼器が出土したが、そのうち一件の銅尊の圈足内壁には 𠄎 組4字の陽文の鑄銘があった(図4 e.)。一字目の 𠄎 は王裕口村M103およびM94出土の銅器銘 𠄎 第一字の 𠄎 と類似しており、同字と考えてもよいかもしれない。戚家莊東地M235墓の年代は殷墟文化第4期とされるが、銅尊のほかにも同じ墓葬から複数の“鉞箠”銘をもつ青銅器が出土していることから、墓葬の族属は“鉞箠”であり、箠族の墓葬中に 𠄎 族の青銅器が同葬されたと考えるべきであろう。また、該墓から出土した青銅器銘文は、 𠄎 をはじめ、全てが陽鑄されたものであった。一方、 𠄎 銘と対になって現れる 𠄎 も、金文の図象銘として頻繁に現れる文字で、 𠄎 (三代2.2鼎)、 𠄎 (三代14.8、父癸辰盃)、 𠄎 (三代13.10、辰辰父乙卣)、 𠄎 (三代6.34、 𠄎 簋)などが単独で用いられている例である。また、殷墟からの出土品中にも 𠄎 銘をもつ青銅器があることが知られている⁹。

次に、 𠄎 族の族墓と考えられている王裕口村M103とM94の二つの墓葬の年代や関係性について検討してみたい。出土遺物、ことに土器の分析から、M103墓の年代は殷墟文化第2期、M94はそれより時代がくだって殷墟文化第3期と考えられている。 𠄎 族の族徽ともいべき図象銘について比較すると、M103では 𠄎 (銅印だけが 𠄎)、 𠄎 、 𠄎 の3通りの銘があるが、M94では 𠄎 銘のみである。注目すべき点は、墓葬の質的違いで、M103が小規模ながら豊富な副葬品にみちており、殷墟初の伴出遺物として銅印が発見された一方で、M94は墓の大きさに比して随葬品が質的にも量的にもM103には及ばない。このことから、埋葬され

た𠄎族が、有力氏族として多方面に及び複雑化していった第2期から、時代が下って第3期へと移行するに
したがって族勢が低下していったことが、M103とM94に現れていることが推測される。

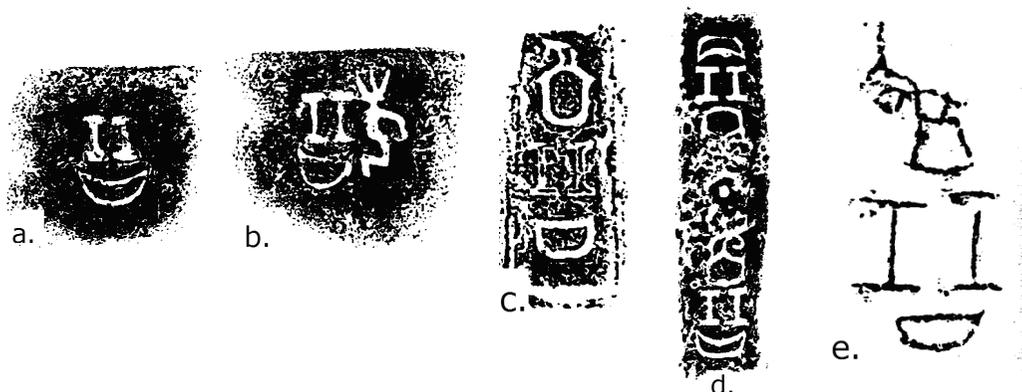


図4 a. 王裕口村出土青銅鼎銘 b.同鼎銘 c. 同爵銘 d.同弓形器銘 e. 戚家莊東地出土青銅尊銘

殷墟劉家莊出土𠄎字印

該印の出土地点である劉家莊北地は、殷墟の南部に位置し、殷墟の宮殿宗廟区からは南に1000メートルほど離れたところにある。すでに2006年から2008年にかけて2度にわたり発掘調査が行われていたが、今回の調査範囲は広域にわたるもので、3万平方メートルに及ぶ面積を掘り起こした大規模な発掘であった¹⁰。道路や水路、建築基址を始め、製陶工房址、祭祀坑、窖穴、墓葬など数多くの遺跡が出現し、大量の遺物が発見された。該印は祭祀坑のうち最も規模の大きな人祭坑H77から、人骨6体と鴉身人面像2点とともに出土した(図3b)。一辺2.2cmの方形、鼻紐の陽文印で、発掘時には錆による腐食が相当進んだ状態で発見された。印面は文字と紋様が上下に配される様式で構成されており、印面上部には、殷周青銅器銘文で比較的良好に出現する𠄎字が左右に二字並列し、下部には夔龍紋が右向きに配置されており、構成要素が文字的な要素と象形紋様の要素からなることから、文字象形印と称することができる。青銅器銘文のように単独で𠄎銘として現れるのではなく、印面に二字を並べて配し、さらに夔龍紋を添えることにより、より𠄎字の表象性が強調されている。印文は陽文であるため、粘土のような軟性の物質に押捺すれば、文字と紋様は表面で凹状に成形される点、伝殷墟出土の三印と同じ形状である。

𠄎字は、殷周青銅器銘文では比較的良好に出現する文字で、殷代の青銅器に屢々出現する図象銘である。これまでに知られている伝世品では、𠄎尊(三代11.3)、𠄎鼎(三代2.7)のように、図象銘として単独で使用される場合と、𠄎父丁簋(三代6.13)のように、父丁という祖先名とともに使用される場合がある。また、近年の殷墟南区においても、苗圃南地、八里莊東地、戚家莊東地などから、𠄎銘を帯びた青銅器の出土が数多く報じられている¹¹。これら遺跡のうち、1992年7月に発掘された苗圃南地M58号墓をはじめ、苗圃南地からの𠄎銘青銅器の出土状況が突出していることから、この一帯の50余りの墓葬は𠄎族の族墓であろうと考えられている¹²。

今回の劉家莊北地でも、発掘区域内の墓葬(M70)から出土した青銅器4点のうち簋、爵、甗の3点に同じ𠄎銘が記されていた(図5)¹³。該墓は人祭坑H77からやや東方のさほど遠からぬ地点に位置し、層位や副葬品から、𠄎字印が出土した祭祀坑H77と同じく殷墟文化第2期の遺跡と考えられている。出土地点が近接している点と、遺跡の年代が同時期である点から、𠄎を表象している印章およびその所有者(使用者)は、𠄎族の族墓の中でも特にこの墓葬の被葬者と深い関係があるものと思われる。劉家莊と苗圃は殷墟の南区で隣接

した地域であり、この一帯に殷墟文化第2期以降徐々に 𠄎 族の居住地や墓地が形成されていったのであろう。劉家莊北地からは同時期の製陶工房遺址が発見されており、苗圃南地においても、M58号墓やM47号墓などの 𠄎 族墓からさほど遠くないところに 𠄎 族の銅器工房遺址が見つかることから、 𠄎 族が殷墟の手工業生産とかわりのある氏族であった可能性を示唆する見方も出てきている¹⁴。 𠄎 族の墓葬からこれまでに多数の 𠄎 銘青銅器が出現したことに加えて、今回の発掘において初めて、人骨6組及び鳥身人面像2体とともに 𠄎 字印が出現したことは、族徽を象った印章が祭祀儀礼における犠牲や祭祀用具の一つとして機能していたことを推測させるものである。

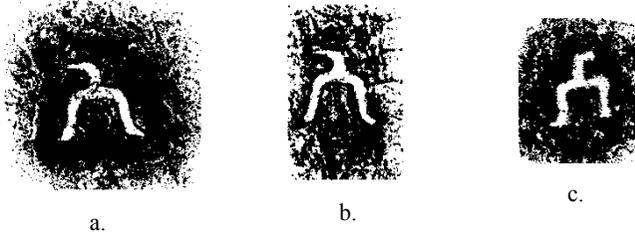


図5 劉家莊北地出土青銅器銘文 a. 鼎 b. 爵 c. 甗

4 新出殷壘上の 𠄎 字について

王裕口村出土銅印と殷墟武丁期の貞人「 𠄎 」について

王裕口村遺跡の墓葬M103から随葬品として出土した文字印について、被葬者はその所有者であると考えられることに誤りはないのであろう。甲骨文に見える 𠄎 、 𠄎 などの字形から考察すれば、 𠄎 は本来 𠄎 とつくるべきところだが、180度回転させて 𠄎 と配置している点は、銅印のみに見られる字形的特徴である。では、この人物がいかなる人物であったかについて、関係する甲骨文から読み取れることについて以下に検討を加えることとする。

甲骨文に現れる 𠄎 字が武丁期の貞人であることについては、饒宗頤が次のように述べている。

ト人名 𠄎 者、尚未詳為何字。其異体有 𠄎 （後下 23.12）、 𠄎 （前 6.39.8）、 𠄎 （甲 3493）及 𠄎 （林 2.10.8）等形、象置二玉于器中、 𠄎 變而為 𠄎 、可知其即珣字、茲再舉証以明之……

貞人の中に 𠄎 を名とする者があるが、何という文字かは未詳である。異体字に 𠄎 、 𠄎 、 𠄎 、 𠄎 などの字形があるが、それは玉を二つ容器の中に入れた様子を表しており、 𠄎 が字形変化して 𠄎 になることから、これが珣字であることがわかる。…

𠄎 を 𠄎 の異体字として解しているが¹⁵、陳夢家が指摘するごとく¹⁶、 𠄎 と 𠄎 は明らかに別字であり、それぞれが武丁期に存在した貞人と考えるべきである。また、 𠄎 （後下、29、17）と作る字形もあり、むしろ 𠄎 の異体字と見做すべきはこちらの字形であろう。 𠄎 と 𠄎 を同字と見做すか否かについては議論の余地があるが、今ここに貞人 𠄎 による貞トを集めると、以下のような辞例が挙げられる。

- ① 壬辰ト、 𠄎 貞、今夕亡 𠄎 ?（簠、貞類 32/合 16582）
壬辰の日にトす、 𠄎 、貞す「今夕、わざわざい亡きか?」と。【ト夕】
- ② 口未ト、 𠄎 貞、今夕亡 𠄎 ?（合 16583）
口未の日にトす、 𠄎 、貞す「今夕、わざわざい亡きか?」と。【ト夕】
- ③ 癸酉ト、 𠄎 貞、旬亡 𠄎 ?七月（前 6.39.7/合 16702）

- 癸酉の日にトす、、貞す「旬、わざわざい亡きか？」と。七月。【ト旬】
- ④癸酉ト、貞、旬亡田？(甲 2122/合 11546、即ち大亀四版中の第四版である)
癸酉の日にトす、、貞す「旬、わざわざい亡きか？」と。【ト旬】
- ⑤癸未ト、貞、旬亡田？五月(続存 1.892/合 16677)
癸未の日にトす、、貞す「旬、わざわざい亡きか？」と。五月。【ト旬】
- ⑥癸卯ト、貞、旬亡田？六月(合 16695)
癸卯の日にトす、、貞す「旬、わざわざい亡きか？」と。六月。【ト旬】
- ⑦〔癸〕巳ト、貞、旬亡田？五月(林 2.10.8/東大 72/合 16850)
〔癸〕巳の日にトす、、貞す「旬、わざわざい亡きか？」と。【ト旬】
- ⑧癸亥ト、貞、旬亡田？(京津 1807/誠 30/合 16907 正)
癸亥の日にトす、、貞す「旬、わざわざい亡きか？」と。【ト旬】
- ⑨□□ト、貞、丁卯于~~𠄎~~〔亡〕田？(京人 1140)
□□の日にトす、、貞す、「来たる丁卯の日に、~~𠄎~~において…するにわざわざい亡きか」と。【その他の貞ト】
- ⑩丙□〔ト〕、〔貞〕、□亡〔田〕(後下 25.17)
丙□の日にトす、、貞す、「…わざわざい亡きか」と。【その他の貞ト】
- ⑪己亥ト、貞…(天理 246)
己亥の日にトす、、貞す…【その他の貞ト】
- ⑫。 (甲 1352/合 264)【記事刻辞】
- ⑬自…。 (続存 1.28/合 9453)【記事刻辞】
- ⑭。 (金 525/英 1179)【記事刻辞】

①と②はその日の晩に不吉なことがないかを貞トしたト夕ト辞である。

③から⑧は翌日からの十日間にわざわざいがないかを貞トした貞旬ト辞である。④甲 2122 は、1929 年の殷墟第 3 次発掘において発掘された大亀四版の第四版であり¹⁷、董作賓の甲骨文断代研究における十個の標準のひとつである「貞人」の確定に多大な影響を与えた一片として広く知られている¹⁸。後に、嚴一萍氏により甲 2106 と綴合された(合 11546)。当亀版上のト辞は計 23 辞あり、そのすべてが所謂「貞旬ト辞」で、貞トに参加した貞人は争・充・賓・咎・・の 6 名である。⑦東大蔵骨にはほぼ同じ文例の貞旬ト辞があるが、貞人名はとあり、と同一貞人かそれとも咎と同一貞人とみなすか、議論の余地がある(東大 71)。

⑨と⑩はト辞が完全に残っていないものの、「わざわざい亡きか」という残辞から、何らかの事象についての吉凶をうらなう貞トであったことがわかる。⑪は「トす」「貞す」のみしか残存しないが、貞人はである。

⑫から⑭は貞トではなく、胡厚宣の所謂、武丁期記事刻辞である。すなわち、貞トに使用される亀甲や獣骨の来貢などに関する記録であり、記事の刻された甲骨の部位によって、甲橋刻辞、甲尾刻辞、背甲刻辞、骨白刻辞、骨面刻辞の五種に分類される¹⁹。の名が刻されているものは 3 点、いずれも甲橋刻辞で、⑫と⑭は字が単独で刻されているのみだが、⑬では「自」という残辞とともに記されている。は気と么とも積され²⁰、殷王室より貞ト用の亀甲獣骨を求め得たことを表す動詞として、⑬の残辞のように、「+自+固有名詞」という文例で用いられる。この固有名詞には、この亀甲を乞求した地名、それも殷の小屯からそれほど遠くない場所を表す語があったものと推測される²¹。こうした記事刻辞の末尾には、字の如く、しばしば賓、亘、などの人名が刻され、その亀甲獣骨の管理者を表したものとされるが、貞人と共通する名前が多い。したがって、もまた他の貞人同様、貞トの官として亀甲獣骨の管理に関与していたことを示していると考えてよいだろう。印の出土した墓葬の年代は殷墟第 2 期であり、これは武丁期の貞人であるの活動時期とも合致する。該印の出土は、貞トと貞ト用の亀甲の管理をしていたと考えられる人物の職掌や身分、族の社会的地位の高さを示す証拠ともなりえよう。

5 おわりに

春秋戦国以前の印章については、殷墟出土とされる、黄濬『鄴中片羽初集』並びに『同二集』に著録された伝世品3点が知られるのみであったが、1998年に初めて殷墟の科学的な考古学発掘による新出の銅印を得たことが契機となり、従来は戦国時代の肖形印と考えられていた故宮蔵印もまた、殷代の遺物であることが判明した。さらに、殷墟南区における発掘調査で2顆の銅印が得られたことにより、発掘時の墓葬や同出遺物についての詳細な報告から、印章の所有者や用途についての推測をさらに深化させることが可能となりつつある。甲骨文にある、などの字形から考察すれば、のは本来であり、標準的な字形としてはとすべきであったものを、なぜ族の墓から出土した銅印だけがを180度回転させてという字形になったのか。また、族の族墓の範囲にある祭祀坑から出土した銅印だけが、と夔龍紋を上下に配置した特殊な構図の文字象形印であるのは何に由来するのか。これらの現象に対して考え得る仮説としては、族徽としてのやの強調のため特にこのような特殊な字形や構図を用いた、ということがあろう。さらに、成形や用途という観点から、陰文の印と陽文の印を比較すると、粘土のような軟性の物質への押捺時の形態の違いが、殷墟青銅器の大多数を占める陰鑄の銘文と、少数ではあるが陽鑄の銘文となんらかの関係の有するのではないか、など、今後検討すべき課題は尚多い。

中国における印章の起源については、これまで戦国時代の肖形印の起源を古代オリエントの円筒印章〔シリンダーシール〕に関連付けた論考が提起されたことがある²²。円筒印章は、メソポタミアで用いられていたシュメール人の言語を記述した楔形文字を記録するのに適した形態であったが、三千年に及ぶ使用期間を経て、アッカド語をはじめ様々な言語を、他の素材にアルファベットで記すに及んで姿を消したとされる²³。春秋時代の中国で、この円筒印章の如く、粘土状の柔らかい物質に人物や動物などの立体物をレリーフ状に捺す肖形印が出現し一般化していくのは、西方から到来した印章文化の影響と考えられる。しかし、今回、殷墟から出土したと考えられる7点の銅印はそのいずれもが、円筒印章〔シリンダーシール〕とは明らかに来源がことなり、むしろスタンプ印章に由来する考古遺物と考えられる。春秋時代以前に、西方からの物質文化の波が到来したとされる殷墟後期に、西方から円筒印章をさらに遡るスタンプ型の印章が齎され、殷墟から出現したこれらの印章の祖型となっただけではないかとの仮説は、今回の新資料の出現により十分に成り立つと言えよう。西方起源の文明が東漸して古代中国に幾たびか齎された物質文化の波の一つ、と考えてよいかもしれない。今後の発掘により殷墟周辺部からより多くの遺跡や関連遺物が出現する日が俟たれる。

注

¹ 新潟県立大学国際地域学部 (gaojiu@unii.ac.jp)

² 劉正成主編『中国書法全集』第92巻 先秦璽印、199頁、榮宝齋出版社、2003年。李学勤「試説伝出殷墟の田字格璽」『中国書画』2001年第6期。

³ 于省吾『雙劍詠古器物図録』巻下、11-13頁、1940年。台北故宮博物院の蔵品となってからは、徐暢「商璽考証」『故宮文物月刊』第4巻第12期、国立故宮中央博物院聯合管理处編『故宮青銅器図録』下冊下編璽印類、図下499、500、中華叢書委員会、1958年、などに著録された。

⁴ 故宮博物院肖形印編輯室『故宮博物院蔵肖形印選』人民美術出版社、1984年。温廷寛『中国肖形印大全』60頁、山西古籍出版社、1995年。

⁵ 徐暢「先秦璽印概論」『中国書法全集』第92巻 先秦璽印、劉正成主編、榮宝齋出版社、2003年。李学勤「殷墟新出土銅璽」『中国書画』2004年第2期。

⁶ 何毓靈・岳占偉「論殷墟出土の三枚青銅印章及相關問題」『考古』2012年第12期。

⁷ 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「河南安陽市殷墟王裕口村南地2009年発掘簡報」『考古』2012年第12期。

⁸ 安陽市文物工作队・安陽市博物館『安陽殷墟青銅器』中州古籍出版社、1993年、図版68。

- ⁹ 注 8 前掲書、図版 114、光父辛爵(安陽市博物館蔵 0125 号)。
- ¹⁰ 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「河南安陽市殷墟劉家莊北地 2010~11 年発掘簡報」『考古』2012 年第 2 期
- ¹¹ 注 8 前掲書。𠄎 卣鼎(彩色図版 2: 苗圃南地 M47:1、殷墟文化第 3 期)、𠄎 爵(図版 10: 苗圃南地 M58:1、殷墟文化第 2 期)、𠄎 爵(図版 11: 苗圃南地 M58:2、殷墟文化第 2 期)、𠄎 觚(図版 12: 苗圃南地 M58:4、殷墟文化第 2 期)。但し、本銘のみ陽鑄で、かつ本書図版では銘を左に 90 度回転させて収録している)、𠄎 爵(図版 84: 八里莊東地 M52:1、殷墟文化第 4 期)。𠄎 器蓋(図版 36: 戚家莊東地 M269:25、殷墟文化第 3 期)。その他、苗圃南地 M67 号墓から出土した簋(M67:4)も、𠄎 銘を帯びていたことが報告されている(同書 5 頁)。
- ¹² 孟憲武・楊松山・李貴昌「殷墟南区墓葬青銅器群総合研究」『安陽殷墟青銅器』中州古籍出版社、1993 年。なお、殷墟以外の地域でも、陝西、山西、河北などの地から𠄎 銘を帯びた青銅器が数多く出土することが知られており、𠄎 は周族のなかの有力な氏族で、もとは山西との境域に居住していたのではないかとの推測もある(鄒衡「論先周文化」『夏商周考古学論文集』310 頁、科学出版社、2001 年)。
- ¹³ 劉家莊北地からは、この他に 2 座の墓葬からも𠄎 字銘の爵 1 件(M413)と鼎 1 件(M448)が出土したことが報告されている(注 6 前掲論文および注 10 前掲論文)。
- ¹⁴ 注 6 前掲論文。
- ¹⁵ 饒宗頤『殷代貞卜人物通考』553 頁、香港大学出版社、1959 年。
- ¹⁶ 陳夢家『殷墟卜辞綜述』174 頁、科学出版社、1956 年。
- ¹⁷ 董作賓「大龜四版考釋」『安陽發掘報告』第 3 期、1931 年。
- ¹⁸ 董作賓「甲骨文断代研究例」『国立中央研究院歴史語言研究所集刊外編・蔡元培先生六十五歳慶祝論文集』、1933 年。
- ¹⁹ 胡厚宣「武丁時五種記事刻辞考」『甲骨学商史論叢初集』齊魯大学国学研究所(成都)、1944 年。
- ²⁰ 于省吾「积气」『甲骨文字积林』中華書局、1979 年。陳夢家前掲書 177 頁。
- ²¹ 貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字・本文篇』350~356 頁、京都大学人文科学研究所、1960 年。
- ²² 新関欣哉「中国印章の起源に関する一考察」『東西印章史』東京堂出版、1995 年。
- ²³ ドミニク・コロソ著・池田潤訳『オリエントの印章』、学藝書林、1998 年。円筒印章[シリンドラーシール]にとつかわるアルファベットとスタンプ印章の出現は、紀元前千年期におけるフェニキア文字の普及と表裏一体の関係にあったと言われている。

引用甲骨金文著録略号

前	羅振玉『殷虛書契』1911 年
後	羅振玉『殷虛書契後編』1916 年
林	林泰輔『亀甲獸骨文字』1921 年
鄴初	黄濬『鄴中片羽初集』二卷、北京尊古齋、1935 年
鄴二	黄濬『鄴中片羽二集』二卷、北京尊古齋、1937 年
金	方法斂・白瑞華『金璋所蔵甲骨文字』1939 年
誠	孫海波『誠齋殷墟文字』北京修文堂書店、1940 年
甲	董作賓『小屯殷墟文字甲編』商務印書館、1948 年
京津	胡厚宣『戦後京津新獲甲骨文集』群聯出版社、1954 年
続存	胡厚宣『甲骨続存』群聯出版社、1955 年
京人	貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字・図版篇』京都大学人文科学研究所、1959 年
合	郭沫若主編『甲骨文合集』中華書局、1978~1982 年
東大	松丸道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字』東京大学東洋文化研究所、1983 年
英	李学勤・艾蘭『英国所蔵甲骨文字集』中華書局、1986 年
天理	伊藤道治『天理大学蔵甲骨文字』天理時報出版社、1987 年